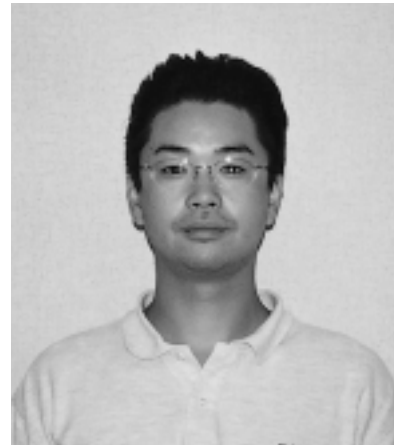


モンゴルの大自然、 そして子供達との出会い

モンゴルボランティアツアーに参加して

執行委員 松原義昭
(化・機器製造室)



はじめに (モンゴルってどんなところ)

今回の旅の説明をする前に、まずは「モンゴルってどんなところ」かについて、少し話をしてみたいと思います。

モンゴルは中国の北側にあり、遠い昔にはみなさんも良く知っているチンギス・ハーンが巨大な帝国を作っていた国です。その全盛期には東は朝鮮半島から中国全土、西は中部ヨーロッパ、北はシベリアから南は北インドまで広大な領土を持っていました。その後、歴史は流れて中国の影響下続き、近代では最近までソ連の指導のもとに社会主義国家がモンゴルの政治を納

めていました。

国土に広さは日本の約4倍の面積があり、緯度(南北の高さ)はパリ、ミュンヘン、ウィーン、シアトルなどと同じ位置にあります。気候をみると、年間を通じて平均気温は16度以下であり、冬場の最低気温はマイナス40度と日本と比べて寒い気候となっています。

モンゴル人はもともと広大な草原を遊牧をして生活している民族で、現在の人口は約234万人ですが、その内、まだ4割近くの方がゲルと呼ばれるテントのような移動式の家で寝泊まりし、家畜とともに遊牧の生活をしているそうです。

私たち日本人の祖先もモンゴロイドと呼ばれ、モンゴルの人たちと同じ祖先から別れてい



モンゴルはここにあります

ったものと考えられており、現地で出会った人々はとても日本人とそっくりで、思わずくんと声をかけそうになったほどです。

遊牧民族であるモンゴル人は、本来その食生活の大部分を家畜に依存して来ました。特に、馬や羊などの生乳から作られる乳製品はさまざまな種類にわたっており、短い夏や厳しい冬を乗り切るために欠かせないものになっています。肉類はほとんど羊で、ひとつの肉でいろいろな料理の方法があります。肝心の料理の味については、後ほど旅の報告としてじっくりと紹介したいと思います。

モンゴルの民族衣装はデールと呼ばれ、生地の厚い着物に帯そしてズボンを組み合わせているものであり、男女の区別なく着ることができる便利な衣装です。季節に応じて厳しい冬は毛皮を内張りに使ったりしているそうです。もっとも最近ではデール以外の服を着ている人もたくさん見られ、日本と同様に必ずしもみんなが民族衣装を着ているわけではないようです。

モンゴルも現在では草原の他に近代的な都市が見られ、特に首都のウランバートルは大都会であり、日本からはモンゴル航空、通称ミヤット(MIAT)が週に2便、関西国際空港より往復しています。日本からは約4時間でウランバートルまでたどり着き、シンガポールやタイに行くよりも早く到着することができます。遠い国だと思われがちですが、意外に近くて驚いてしまいます。そんなことから、最近ではモンゴルの大自然に憧れた観光客が頻りに訪れる観光地にもなっているようです。

モンゴルの大自然は本当にすばらしく、言葉や映像ではその全てを表すことはできないほどなのですが、現在のモンゴルにはもう一面の顔を持っています。

最初に話したとおり、モンゴルはソ連の指導のもと社会主義の政治が行われていました。ソ連の資源や資本による工業化が進められ、遊牧民の定住化が進められてきました。しかしソ連の崩壊の後、ソ連からの資源や資本そして技術

者が全面的に引き上げてしまい、残されたモンゴルの経済は混乱した状態に陥りました。そうした背景のもと親に見捨てられた子供たちが急増し、住む場所を失った子供たちは夜露がしのげ、スチーム配管の余熱によって凍死から免れることのできるマンホールを、新しいねぐらとして集まっているそうです。こうした子供たちはマンホールチルドレンと呼ばれ、モンゴル全土で3千人とも4千人ともいると言われています。現在は資本主義の政治のもと、各国の支援により経済的には回復しつつありますが、マンホールチルドレンと呼ばれる子供たちへの対策については、まだまだ手が回っていないのが現状のようです。

7月から8月にかけて、私たちもこうした子供たちに対し支援物資集め日本からの物資を送る活動を行ったわけですが、モンゴルの本当の姿と、今、何が必要なのかということを知るために実際にモンゴルを旅してきました。

今回、実際にモンゴルの大自然のすばらしさとそこに暮らす遊牧民の人々、そしてその反面、支援を必要としている子供達がいるという現実、この二つをこの目でしっかりと見て、大自然と子供達とふれあいを通じいろいろと感じ取ってきたことをみなさんに話したいと思います。

モンゴルへ向け出発！

8月17日

関西国際空港16：10発、モンゴル航空9032便にて日本を離れ、ウランバートル空港に到着したのが20：00でしたが、時差が1時間あるのでモンゴルはまだ19：00でした。季節は日本と同じ夏ですが、気温は日本ほど高くなく、夏の日中平均気温は16℃、夜間は内陸地のため10℃以下まで下がります。日没時間が遅いため夕日がまぶしいぐらいに感じられ、夕立の後ということもあって巨大な虹に出迎えられました。

通訳のガンボルト氏と挨拶を交わし、送迎バス(かなり古いトヨタ製)に乗りウランバートル

ル市内にある宿泊先イヒテンゲルホテルへ向かいました。ウランバートルの道路はお世辞にも良いとはいえ、舗装してあるものの、至る所が陥没しておりハンドルをとられバスが左右に揺れます。空港から少し行くと、進行方向の左側には街並みが見えるものの右側は草原で牛、馬、羊、山羊などが放牧してあります。さらに10分ぐらい走ると、街並みが見え始め人並みも目にするようになり、旧ソ連が残っていた建造物が建ち並んでいます。更に20分ぐらい走ってようやくホテルの門の前に到着しました。そこにはモンゴルの兵士が守衛として待機しており、厳しいボディチェックを受け何とかチェックインできました。

このホテルは迎賓館とも呼ばれており趣のある少し古めのホテルで、中に入ると薄暗くアンティークなエレベーターが2機あり、ここは、旧ソ連が撤退するまでは軍の司令部だったそうです。ルームキーをもらい部屋へ入ると、花柄のカーテンやベッドカバーとまるで新婚さんハネムーンで泊まるような可愛い作りでしたが、そのわりに風呂はユニットバスで、バスタブはなくシャワーだけになっていました。夕食にはモンゴル赤十字の副総裁ネルグイ女史を招き、自己紹介や各々のツアーに参加したいきさつ、意気込みなどを話しながら、簡単な晩餐会を行いました。晩餐の後、部屋に帰りシャワーを浴びようと風呂へ行き、蛇口を開くとなんと茶色い湯が出てくるので、しばらくそのままにしておいたのですがいっこうに透明の湯は出てきませんでした。あきらめて体を洗うことにしたのですが、湯上がりを使ったタオルの色は言うまでもなく茶色になっていました。日本との大きな違いを目の当たりにし、24：40に就寝しました。

後日、モンゴル人にとって水はとても貴重で、風呂に入ることができない人もたくさんいることを知るとともに、ツアー中に川で体を洗っている人も見かけ、改めて水の大切さを感じました。

初めてのゲル 南ゴビ Part 1

8月18日

モンゴル初日は、南ゴビに移動することになっており、朝の5：30に起床、朝食を済ませ6：30に空港へ向かいました。空港へ到着したものの、行き先の南ゴビが悪天候のため7：20発のフライトが12：00発に遅れたため、いったんホテルに戻り、予定を変更して昼までの時間は市内観光となりました。まずウランバートルのスーパーに入り軽食や菓子類などの買い物を行い、郵便局でポストカードなどを買いました。再び空港へ戻りましたが、まだ雨は小康状態で飛行機が飛び立つ様子もなく、少しぐらいの雨ならフライトできないのかと思いながら待機していると、ようやく14：00に出発となりました。

飛行機はボロボロの60人乗りプロペラ機で、内装もボロボロ、シートベルトも壊れており、飛行機が傾くと前方のコックピットに通じる扉が開いたり閉じたりする始末でした。飛行機のボロさに関係ありませんが、途中エアポケットに2回も落ち口から心臓がでる思いをしました。ハラハラして飛ぶこと1時間半、ようやく機首を下げ始めました。窓の下を見てみるとま



オンボロ飛行機で地面にランディング

だ大草原が広がっています。飛行機はどんどん高度を下げていくのものの、いっこうに滑走路は見えてこず、見えるのはどこまでも草原、草原だけです。眼下に草原が迫り、高度10m、5m「墜ちる。」と思った瞬間、草原の上にソフトランディングしました。フライトが遅れた理由は、雨の影響で草原が濡れ、地面がぬかるんでしまうと、ランディングできないからであるということでした。

16:00になりかなり遅めの昼食をとって、ビジター用のゲルに案内されました。(ゲルとは、元は遊牧民の住む家で形はテント状で外側を防水効果のある布で覆い、中は中央にストーブを置き周りにベッドが置いてあります。)その後荷物を整理して、バスに乗り本当の遊牧民の方々が住んでいる所へ移動する事になりました。30分ほど走りましたが、どこを見ても草原で、見えるのは牛、山羊、馬、羊ばかりです。もう少し走るとようやくゲルが見えてきました。バスを降り、初めての遊牧民の人たちとのふれあいです。覚えてたのたどたどしいモンゴル語で挨拶すると、とても優しい表情で返答してくれました。その日は何かのお祭りの日らしく、家族全員集合してのお祝いの最中にも関わらず、我々全員をゲルの中に案内し、馬乳酒や、ヨーグルト、山羊の肉など、この上ないごちそうでもてなしをしてもらいました。その後、子どもたちにあめ玉のプレゼントしたり、ポラロイドカメラで撮影したものをプレゼントすると、今度は馬やらくだに乗せてくれたりと、とてもいい交流会ができました。

ここは360度見回しても草原であり、どこまでも地平線が続く光景を見て、心が洗われるようでした。そんな環境下に住んでいるせいか、現地の人たちは大人も子供もとても純粋で疑うことひとつ知らない表情で接してくれ、1時間ほどの交流会でしたがとても感動しました。

その日は、その後ビジター用のゲルへ戻り、夕食をとり24:00に就寝しました。



外側から見たゲル



ゲルの内側

モンゴル大自然とミルキーウェイ 南ゴビ Part 2

8月19日

2日目は午前8:00に起床し、朝食を済ませて古いマイクロバスに乗り込みました。大自然の悪路を走ること約1時間、目的地のヨリンアム渓谷に着く少し前にトイレ休憩もかねて、本当に小さな博物館に立ち寄りしました。中へ入ると、モンゴルに生息している動物などの剥製が展示してあり、年輩の現地の人々が動物の名前だけを日本語で言って後はモンゴル語で説明するという、それなりのサービスで館内を案内してくれました。その隣では、1回1US\$で打つ事ができるモンゴル弓の試打場(野外で20mくらい先に的があるだけ)がありました。そのまた隣には、お土産屋があり、民族衣装(デール)などをまといチンギス・ハーンになって、



大草原と遊牧の民

撮影できるといった、日本の太秦映画村みたいな所でした。

再びバスに乗り走ること30分、だんだん山間の中へ進み目的地のヨリンアム溪谷に到着しました。この先は、歩くか、馬に乗せてもらう(往路6US\$)かの選択をして、山あいを進んでいくので、私は歩きを選択し前進して行きました。しかし、辺りの景色は低い丘に囲まれ、溪谷というにはほど遠い感じでした。20分ぐらい歩くと岩山(標高約30m)の姿が見えだし道もだんだん狭くなり、とうとう馬でもここまでというところまで来たので、ここからは、みんな徒歩で溪谷の奥へと進むことになり、溪谷の美しさと、小川のせせらぎやおいしい空気の中、時間を忘れ体力の消耗も忘れて厳しい悪路も助け合いながら、奥へ奥へと進んでいきました。道中、観光で来ていた日本人にモンゴル語でサインバインノー(こんにちは)と言われこちらサインバインノーと言いつつ、やはり日本人はモンゴロイドだと確信した次第です。約30分ぐらい歩いたのでしょうか、このまま行くとそのうち中国へたどり着きそうな気がして、引き返すことにしました。引き返すこと1時間、あたりを見る元気もなくバスへ到着し、一路ビジター用のゲルへ直行しました。

15:00にビジター用ゲルで、やっと昼食にありついたのでつかの間、16:00にはまたまた出発、バスに乗り込み目的地バヤンザック(バヤンはたくさんという意味でザックは木の意味)

へ。直行と思いきやまたもや途中下車し、大草原の中で、遊牧民のゲルに突然のアポイントなしで訪問しました。しかし、彼らは驚きの表情や困惑した表情ひとつも見せずに、あたかも私たちが来るのを知っていたかのように家族全員で出迎えてくれました。そして、モンゴルの伝統的な歌を披露をしてくれたり、私たちが日本の歌を披露するときは手拍子してくれたり、馬、らくだに乗せてくれたり、ゲルの中に招待してくれ馬乳酒、ヨーグルトを振る舞ってくれました。

大草原の中、自然と走りたくなり少し遠くまでランニングしてみると、そこでは雑音ひとつなく聞こえるのは風の音だけ、なんとロマンチックなんだろうと思いました。こんな中で暮らしている人たちだからこそ、こういった振る舞いのできるのであろうと改めて思いました。

遊牧民のゲルをあとにし、目的地へ進みました。約1時間半、ガタガタ道を走り、お尻がそろそろ限界の悲鳴を上げそうな頃目的地に到着しました。辺りの景色は、お尻の痛さなど吹っ飛ばぐらい、言葉では言い表せないほどの絶景でした。敢えて言葉で言い表すと、谷になっており全体赤土(柔らかく粘土質)に覆われ遠くには林っぽいものが見え、いわば小さなグランドキャニオンみたいでモンゴルなのにアメリカって感じでした。こんな光景は日本中どこを探してもないだろうと思います。(ちなみに私は



モンゴル版グランドキャニオン“バヤンザック”

アメリカのグランドキャニオンにはまだ行ったことはありませんが……)感動するのもつかの間、またもや自然の悪路へ出発進行し、約2時間かけビジター用ゲルに着いたのは21:00で、その後すぐ夕食をとり、しばし歓談のあと各ゲルへ。

そろそろ日が変わろうという時間に、たまたまトイレのために外に出ると、うわさに聞いていた満点の星空が目の前に出現しびっくり、まさに自然のプラネタリウムで、地面に寝っころがり星空を見つめました。初めてみたミルキーウェイ(天の川)、地平線から地平線までびっしりのスターダスト、また瞬きするまもなく流れ星を見ることができ、本当に手に届きそうなくらいははっきり見え、心が洗われるようなくらいというっりした状態で就寝時間1:00を迎えました。

こどもたちとのふれあい、涙

8月20日

翌朝は午前7:30に起床し、朝食後ウランバートルへのフライト時間までビジター用ゲルで世話をしてくれた現地の青年達と野球で交流しました。みんな野球するのは初めてのようで、グローブの使い方もままならないまま、ノックを受けたり、フリーバッティングしたりして、南ゴビ最後のレクレーションを楽しみました。どこでも1人ぐらいは必ず運動神経のいいヤツがいて、少し教えただけで簡単にやってのけました。言葉は通じなくても分かりあえ、感じあえるのがスポーツだなとあらためて痛感しました。

9:50にまたもや恐ろしいボロボロのプロペラ機で、草原の滑走路を必死の思いで飛び立ち一路ウランバートル空港へ出発し、約1時間半のフライトでしたが無事到着しました。ホテルへ戻り、昼食後少し休憩をはさみ14:30にバスに乗りウランバートル市内の赤十字へ向かいました。副総裁のネルグイ女史を交え、主催者の

瓜谷氏への感謝状や勲章の授与式をはじめ、我々の持ってきた野球道具などの贈呈式を執り行い、その後、精一杯の料理とモンゴルの音楽などでもてなしを受けました。

モンゴルへ来て4日目になりますが、どこへ行っても同じ料理が出てきます。モンゴルでは最高のもてなし品であることは百も承知をしているものの、前菜は必ず羊の肉のスライスしたものと野菜のオイルとビネガーであえたものとトマト。メインはボウズと呼ばれる一見豚まんのようなもので、中身は羊の肉のミンチを固めたものが入っており、外側を小麦粉で覆い蒸したものです。味の方は臭いも独特のものがあり、人によるかも知れませんが、たぶん好き嫌いの差が大きく分かれると思います。(同行した岩本君はしっかりと食べていましたが……)それと馬乳酒ですが、2日目、3日目、4日目と家庭によって味が違うことに気づきました。すっぱい味で酒に牛乳を少し入れた感じの飲み物ですが、飲み過ぎるとモンゴルの人でもおなかをこわすらしく、案の定、このあと私はトイレと大変仲良くなりました。

レセプションが終わり、バスに乗り街から30分ほど行き、マンホールチルドレンと呼ばれる親から見放された子供達がいるサマーキャンプに向かいました。サマーキャンプ場へ到着すると下は1歳ぐらいから上は14、15歳ぐらいの男女約60人が、部屋の中から次から次へと顔を出し手を振りながら出迎えてくれました。見た感じ、衣類などは支援物資を配給されているのかきちんとした服装をしており、「本当に彼らがマンホールチルドレン？」という気がしました。ゲルの中で少しもてなしを受けたのち、子どもたちによるお遊戯、ダンス(ジャニーズ系)、日本の歌などが披露され、子どもたちの前向きな姿勢に驚きの連続でした。

私たちもお返しに日本の童謡を披露し、その後、モンゴル風のフォークダンスを一緒にしたり、極真空手の模擬試合をして大いに盛り上がり、我を忘れ童心にかえり遊びに夢中になりま



サマーキャンプ場の子供達

した。こんなに楽しそうにしている子どもたちは、何らかの事情により両親と別れ、人恋しくて私たちに親代わりになってほしいと言わんばかりに、たわむれ、なついてきます。小さな子供達は食べものもろくに取っていないのか、やせ細りおなかが出て典型的な栄養失調体型でした。そんな子どもたちでも将来の夢を各々が持っており、大きな希望を背負って強く生きていこうとしています。こんな現状を目の当たりにし、強い憤りを感じ、自分はいったい何をしてやれるのだろうと思いました。

楽しい時間はすぐに過ぎ去り、ホテルへ帰る時間が押し迫りました。もう少し一緒にいたい気持ちから自然に涙があふれ出し、笑顔で手を振ってくれる子供達の姿が自分の涙でゆがんでいく中、サマーキャンプ場をあとにしました。この感動は、これからの私の人生の中で決して忘れることはないでしょう。その日はホテルに帰っても口数少なく、個々の思いを秘めて24：00に就寝しました。

初めてのホームー

8月21日

午前7：30起床、8：00朝食9：00ホテルを出発。バスに乗り市内から30分、日本人墓地に到着しました。ここは、第二次対戦直後シベリアに抑留されていた日本兵がモンゴルに移送され、あまりにも過酷な労働と極寒で亡くなり、

日本に送還されないまま遺体が埋葬されている所で、入り口には日本語での慰霊碑が建ててあり、埋葬されている人たちの名前の碑もありました。ちょうどその日は、日本から遺骨を送還のボランティアの人たちが来ており、埋葬してある遺骨を丁寧に掘り起こし数百体の遺骨を本土への送還する作業を進めていました。私達は、慰霊碑の前で日本の歌（赤とんぼ・故郷）を合唱し冥福を祈りました。故人の辛かった心のうちを思うと自然に涙があふれてきだし、こんな惨事は二度と起こしてはならないと心に誓いました。

その後、ウランバートル市内にある国立子供芸術センターに到着しました。子供芸術センターとは塾のようなところで、学校から帰ってきた子どもたちが各々立ち寄り彫刻や絵画などを勉強する施設で、ここに通う子どもたちは赤十字で会った子どもたちとは違い、両親は健在で恵まれた環境で育っている子どもたちでした。建物は、旧ソ連の残していったもので、玄関の前にはレーニンの銅像があり今もそのままになっていました。中へ通されるとすぐに歓迎式が始まり、センター長のツエンドルジ氏の挨拶の後、同センターに通っている子供たちの演舞、ダンス、歌などで歓迎してもらいました。その後、日本からの救援物資、物資の目録などを贈呈し、センター長のツエンドルジ氏から瓜谷氏に対し感謝の意が表明され、物資を贈呈した各



民族舞踊で大歓迎！

団体及び個人に対し感謝状ならびにメダルの授与がありました。

レセプション終了後センターの子どもたちに日本の歌（赤とんぼ、故郷など）を披露し、その後センターに通う子どもたちの作った絵や陶芸作品を見学しました。作品の中には、子どもが作ったものとは思えないくらい立派な作品もあり、将来このセンターの子どもたちの中から有名なアーティストが生まれるかもしれないと思いました。

センターで昼食を摂り、いったん服を着替えるためホテルへ戻りましたが、その途中日本というスーパーのような所で、明朝、モンゴルの人たちに振る舞うシチューの材料を買うことにしました。肉や野菜、約30人前分買い込みましたが、なんと値段は日本円で500円以下、この安さに驚きコーラ1本(日本の価格とほぼ同じ)の高さにも驚きました。

服を着替え明日の宿泊の用意をしホテルを出て、約1時間ほどバスで走ったところにある国立子供芸術センターの子どもキャンプ場(旧ソ連の軍事基地跡)へ移動した。本日の宿泊場所となるところです。到着してまもなく、ツアーに参加している方で、我が母校でもある知る人ぞ知る、知らない人は絶対知らない神戸工業高校の弓道の師範で顧問でもある佐々木氏とモンゴル弓道の名人との弓交流会が行われ、日本の弓道の演舞を披露し、モンゴル側は約70m先の



授与された感謝状とメダル

的を射抜く秘技を披露しあい交流を図り、弓談義に花を添えました。

その後夕食に入り歓談したのちモンゴルの楽団による歌、演奏、演舞、ホーミー(1人で一度に二つの声「低音・高音」を出して歌を歌う)で大いに盛り上がり日本人も一緒にダンスなどをし、夜遅くまで盛り上がったそうです。というのも、夕食時にモンゴル人にウォッカを勧められ、コーヒーに入れるミルクが入っているピッチャーより少し大きめのグラスに並々とつがれ、「一気に飲め」といわれるがまま、アルコール度は40度を超え匂いは注射する前に使う消毒液にそっくりなウォッカを、期待に応えてくっとならば口の中、喉の焼けること……。6杯目までは覚えているのですが、気が付いたら頭が割れそうになりながら部屋でくたばっていました。



はじめてのホーミーの大迫力にビックリ!!

ジャパニーズ・シチュー！

8月22日

頭が痛いまま7:00に起床し、急いでキャンプ場の厨房へダッシュし、中へ入るともうすでに数人の人たちがシチューの段取りを始めていました。私自身、家では何もやったことがないのでどういう風に包丁で切っているのかわからず、見よう見まねで取りかかり、人参やたまねぎなどの野菜を何とかひと口サイズに切りました。モンゴルの調理師の方々も火や器材の段取りなどの手伝いをしてくれました。煮込むこと約1時間、とてもいい匂いがしてきてお腹がグーゲーと鳴りはじめ、モンゴルの人たちに食べさせてあげたいがゆえにみんな協力をして作った料理ですが、いち早く食べたいと思ったのは私だけではないでしょう。

作っている最中にモンゴルの調理師たちも、朝粥のようなものを作っており、できあがったものは別の容器に移していました。鍋は洗ってから次の用意に取りかかるのが日本では普通のように思われますが、やはりモンゴルでは水は大変貴重なため、鍋は洗わずに布で拭き取り次の料理に取りかかります。鍋に残った汁などは別容器に保管し、再利用しているようで私たちの作ったシチューは、水は大量に使う、薪もたくさん使う、親切で作った料理といえどもモンゴルの人たちの目にはどう映ったのか大変複雑



テレルジの大自然

な心境でした。

なにわともあれ久々の日本料理とまではいかないものの、日常食べているものを口にすることができ何かホッとしたような気がしました。

朝食の後は、ツエンドルジ氏の案内でキャンプ場内の見学をしました。この施設は元々は軍事施設ただけけれど、将来は学校にするつもりで改造しているそうです。ただし、学校にしてもその運営費用がないため、半分は刊行者向けの宿泊施設として運営費用を捻出できるように計画しているということでした。見学後は移動時間がくるまでの間、キャンプ場内にいる子供達とバスケットボールなどで交流を図りました。

11:00にキャンプ場をあとにし、観光地となっているボクトハーン宮殿へと移動しました。ボクトハーンとは人の名前でラマ教の僧侶だったらしく、その当時はモンゴルの中でもかなり名声が高く、宮殿の中に飾ってある装飾品の数の多さや輸入品の多さ、また剥製の数々を見て贅沢三昧してた人だったんだろうと思いました。

宮殿を離れ、バスで20分ぐらいの所に恐竜博物館があり見学をしました。中は、薄暗い感じで恐竜の骨や、たまご、化石など展示されていましたが、あまり感動もなく、子ども心を失ってしまったようで悲しい思いをしました。その後、またもバスで移動し市内のイタリアンレストランでバイキング式の昼食を摂り、本日の宿泊先であるテレルジへと向かう事になりました。

テレルジとはモンゴルの軽井沢みたいなところでモンゴル人の保養所のようなところだそうです。バスに乗ること約2時間、街から離れ大自然の中へ入って行きました。絶景が続く途中に橋の手前に検問のようなものがあり、その先に進む車には通行料金が必要なようでした。どうやらその先は国立公園になっており、維持費のような感じで料金をとっているようでした。私たちのバスの番が来て通訳の人と料金所の人



海がないのに“海ガメ岩”

が、すでに入金済みであるにもかかわらず「払え」「払った」とひともんちゃくあったものの、ゲートをくぐることができました。引き続きひたすらバスを走らせていくと岩山が見えてきて、その岩は様々な形で巨大な亀の形をしたものもあり自然のオブジェのように見えました。

ようやく到着し、今日の予定ではゲルに泊まるようになっているのに、なぜ普通のホテルに到着したのかなと思っていると、その答えはフロントでの受付終了から3分ぐらいで分かりました。廊下を直進し裏口を開けるとホテルの裏庭があり、その庭にビジター用ゲルがあり、「なんでやねん」と思う気持ちになったのは言うまでもありません。

しばらくして、夕食を摂りゲルで歓談していると、急に赤十字のネルグイさんたちがやってきてホテルのバーで飲んでからと誘ってくれました。しかし、みんな疲れ切っていたので、24:00には私と同行の岩本君の2人以外は就寝となりました。我々もそろそろ寝ようかなと思ったとき岩本君とトイレに行ったのですが、トイレからの帰り際に通訳の人にみつきりバーへ行くことになりました。ウォッカで乾杯し通訳

を通しての会話は弾み午前3:30に就寝しました。

その夜のテレルジはとても寒く、ゲルの中は薪ストーブをつけていましたが、一回の薪をくべる量はしれており火がついている時間はせいぜい1時間程度で、寝てしまうと薪をくべる人が誰もいなくなり震え上がるに違いないので、私が朝まで起きていてみんなのために薪当番をしようと思いました。しかしなぜか翌朝みんな風邪気味でした。

さよなら、モンゴル

8月23日

午前7:30に起床し眠い目をこすりながら朝食を済ませホテル前の草原にある乗馬場へ行き1人2\$払い約20分ぐらいの先導着き乗馬をしました。馬に乗って丘の上に入り眺める景色は、最高の気分をかもし出してくれ、1人で馬に乗れ思いっきり走ることができたら、どんなに気分爽快になれるかと思いました。乗馬を終え、今度は辺りのきれいな景色を探索しました。川が流れ鳥が鳴き緑いっぱいの草原、モンゴルの人もこの景色を眺めりフレッシュしているのだろうと思いました。

昼食を摂り、13:00に出発しウランバートルへ戻りました。お土産屋に行き各々思いを込めたお土産を購入し、17:00にホテルに到着しました。今日でモンゴル泊は最後となり、今度は



馬で川を渡る遊牧の民



空手で仲良くなった男の子

日本側からのお礼の意味を込めてウンドルブクで、お世話になった赤十字の方々や、国立子供芸術センターのツエンドルジ氏を招待し、さよならパーティーを開催する予定になっていました。

ホテルを出発しバスで40分ぐらい走るとウンドルブクに到着。ここも南ゴビと同じでビジター用のゲルがあり観光向けの施設になっており、日本人の観光客の姿も見られました。電気の供給は、送電線からの分が主ではあるがソーラーシステムも導入してあり比較的新しい施設であることがわかりました。辺りには何もなく大草原が広がり馬などの動物が放牧されていました。定刻の18:00は既に過ぎていたのですが赤十字の方々がまだ到着せず、どうしたのだろうと待つこと15分ようやく到着しました。どうやら途中で車が故障したようでした。車は古めかしいロシア製のジープだったのですが、エンジンをかける方法は運転席でキーを回してセルモーターを回し起動させるのはもちろんですが、フロント部分からバーをつっこみ、バーを手動で回転させエンジンをかけるといった見たこともないシステム？が付いているすごい車でした。

車の中から、赤十字のネルグイ女史を始め職員の方と、20日の日に一緒に空手をして遊んだ男の子と、一度来日し日本の子供たちと交流したことがある女の子が降りてきました。再会し

ただけでもうれしかったのですが、男の子は私の顔を見るなり「ま・つ・ば・ら」と呼んでくれ、覚えていてくれたんだなと感極まり思わず涙するところでした。すぐに「さよならパーティー」が始まり、両代表者に対しお礼の言葉を主催者の瓜谷氏が述べ、両代表者からもねぎらいの挨拶が行われ、パーティが進んでいきました。モンゴルの最高料理である、牛乳を入れる大きな缶の中に、丸ごと羊一匹と焼け石を放り込み、外からさらに火で1時間ほどあぶる料理が出されました。少し脂っこいけれど程良い焼き上がりで肉は軟らかく、特に目玉を食べることで体に良い効用があるそうで、確かに子供達も取り合いしながらおいしそうに食べていました。パーティの中ではツアーに参加した人たち1人ずつからこの7日間の感想を述べ、日本の歌をもう一度合唱し日本から持ってきた花火を全員で楽しみ、最後の交流会を終えました。子供たちと別れる寂しさがこみ上げ半分泣きそうな状態で子供たちを抱きかかえ、たどたどしいモンゴル語でバヤルラー（ありがとう）、バヤルタイ（さよなら）を何度も繰り返しその場を後にしました。

22:30にホテルに到着し、各々がものの思いにふけりながら帰り支度を済ませ、最後のモンゴル泊となりました。

そして帰国

8月24日

午前7:00の起床予定を30分も寝過ぎてしまい、あわてて朝食を摂り身支度のあと最終チェックを行って、バスに乗りウランバートル空港へ向かいました。通訳のガンボルト氏と運転手の方にお礼を言い9:30発の便にて帰国の途につきました。14:30に関空到着、各々思いを秘め現地にて解散しました。

おわりに
(旅を終えて考えたこと)

今回のツアーを終えて感じたことですが、モンゴルとは貧富の差が激しい国で、着ている服や車など一見するだけでもそれとわかります。今や、多くの国から経済援助を受け、国の経済、雇用ともに成長しつつありますが、まだまだ先進国から見ると低迷していると言えます。そんな中で、モンゴルの子供たちは豊かな暮らし、希望のもてる将来を夢見て日々頑張っています。両親がいて、初等、中等学校、専門学校、大学などへ進学できる子供たちはモンゴルの中ではとても裕福な家庭の子供達で、ほとんどの子供達は家庭の事情により進学もできず、学校教育も受けられません。勉強したくても出来ない子供達がたくさんいて、私たちはどんなに恵まれた環境で育ったかを、痛感させられました。

ましてや、両親の事情により置き去りにされ、マイナス40にもなるモンゴル厳しい冬を過ごすために、マンホールで暮らすことを余儀なくされた子供たちは、食べていくことさえまなならず勉強どころか生きるか死ぬかの瀬戸際で暮らしています。このような子供たちを少しでも助けようと、赤十字などの支援によって住居、勉学、人のぬくもりなどが与えられています。実際にマンホールチルドレンと呼ばれている子供たちに赤十字のキャンプ場で、子供たちの輝く瞳、自信にあふれたパフォーマンスを見て、屈強に立たされているにもかかわらず不安な顔一つ見せず将来の夢を語っていた子供達と接し、この子供達に対し「私に何が出来るのか」「何をしてやれるのか」と自問しましたが、今の私にははっきりした答えは出てきませんでした。

しかし子供たちの笑顔、将来の夢に対して少しでも何か役に立てることが必ずあるはずと確信しました。その事がはっきりする為には、1人の目より2人の目、2人の目より3人の目と

違った観点から見て、いろいろな人が実際に肌で感る必要があると思います。そして実際に眼で見てきた人たちが、見て、触れて、接し、心で感じたことをお互いに話し合うことによって、よりいっそう充実した活動になることは間違いないと思います。

では、我々の求めているボランティア活動とは何なのか。支援物資や資金を送ったりするのもその一つですが、単にお金でできることがすべてではなく、やはりメンタル面での対応、心と心のふれあいが一番重要と考えます。これは私自身の考えですが、現地で子供たちとふれあい一緒にたわむれ同じ時を過ごし、童心に帰ったように何もかも忘れ一緒に遊んでいる時の事を思い出すと、疲れもどこかへ飛んでいき反対に元気になったように感じられます。もし、あのとき一緒に遊んだ子供たちが日本に来たとしたら、私はどんなに忙しくてもきっと会いに行こうと思います。こういう気持ちこそが私にとってのボランティアではないかと心から思います。

以上